第 16 回：第 3 章−その 1−

対人援助職として働く私が, 観てよかったと思った映画３選

著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

はじめに

今号から，第 3 章に移行致しまして，文献ならぬ映画紹介となる。前回でも触れたが，2021 年度の対人援助学会（2022 年 1 月 30 日開催）の企画ワークショップ「対人援助実践をリブートするこの一本」でとりあげさせていただいた内容となる。

その映画とは，さまざまな援助領域にかかわる私達が自身の臨床の「支え」となったり，臨床に迷った際の道標となったり，臨床を続ける糧となった作品となる。読書の皆様がご興味をお持ちなってくだされば幸いである。

「プリズンサークル」

プリズンサークルという映画は，大きな劇場で上映しなかったこともあり，知名度が決して高くない。しかし，それでも上映中は，心理士（師）として働いているなら観ておいた方がいいと，Twitter の心理クラスターで話題になっていた。

日本で初の官民協働の刑務所である「島根あさひ社会復帰促進センター」では，受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り，更生を促す「TC（Therapeutic Community=回復共同体)」というプログラムが日本で唯一実施されている。窃盗や詐欺，強盗傷人，傷害致死などで服役する 4 人の若者たちが，新たな価値観や生き方を身につけていく姿を克明に描き出していくドキュメンタリー映画で，この取材の許可を得るために 6 年，そして 2 年間にわたり密着取材をした重厚な内容となっている。

恵まれた環境に育った多くの人たちは，犯罪をしないこと，すなわち法令遵守行動を学習する。しかし，映画に登場する若者たちは，生育環境に恵まれずに，犯罪行動に抵抗する態度や行動の獲得に失敗してしまい，生き延びるためにむしろ積極的に犯罪的態度や行為を獲得してきた。こうした生育環境の違いによって，「善良な市民」と「犯罪者」に分けられてしまうことを，まざまざと見せつけられて衝撃的だった。「自分は加害者という意識がなかった。ずっと被害者だと思っていた」という一人の若者が率直に心情を吐露する場面を今

でも覚えている。

自分がもし，逆の立場だったら，犯罪者にならずに「善良な市民」になれただろうか？　この映画を観てから，この問いがずっと心の中にある。

この映画の素晴らしいところは，逆境の中にあっても適切な支援があれば，更生する可能性があることを示したことだ。若者たちは対話をすることで，犯罪者としてではなく，一人の人間として尊重される体験をし，適切な人間関係を取り戻していく。

対人援助職に従事する一人として，援助の必要な人には過去の様々な随伴性があって，現在の行動が発現していることを，この映画を観てから，より感じるようになった。表面的で一時的な行動を見て，その人を判断することのないようにしたい。

「生きる」

生きる。黒澤明の代表作の一つ。末期がんであることが分かったやる気のない市役所の課長が病気をきっかけに一念発起し，これまでの生き方を改め，一部の市民が熱望している公園の建設に積極的に関与していく。生きながら死んでいる。対人援助職は，精神的負荷の大きい仕事である。その摩耗から自分を守るために，流す技術も必要となるが，これを過度に乱用すると，生きながら死んでいる状態で仕事をすることになる。そこに存在しているけど，その場にしっかりと留まっていない感じが，苦しいほど理解できた。そんな状態に陥った時にこの映画を思い出して，自分を鼓舞している。

「カッコウの巣の上で」

カッコウの巣の上で。刑務所から逃れるために精神異常を装って閉鎖病棟に入院した主人公のジャック・ニコルソンが，管理主義的で人権意識の低い看護婦長ラチェッドや病院の体制に反旗を翻すことで，周りの入院患者も人間性を取り戻していく。しかし抵抗運動は失敗し，主人公はロボトミー手術を施されて廃人にされてしまう。

支援を考えるときに，社会的妥当性という広い視点から考える重要性を教えてくれた。病院内で正しい行動をしている看護婦長でも，一般社会の常識と照らしてみれば，その支援が正しかったと胸を張って言うことはできなかっただろうと思う。閉鎖的な環境での支援は，独りよがりの支援にもなりがちであるため，社会とのつながりの中で，より適切な支援とはなにかと問うていきたい。

以上，私が影響を受けた映画 3 作品でした。

－つづく－